在日ディアスポラの生態学的文化地形と グローカリティ

Youngho LEE (李榮鎬 : Professional Researcher, Japanese Institute Dongguk University)

✉ kordiaspora@naver.com

(韓国) 東国大学校日本学研究所専門研究員。日本近現代文学・文化専攻、在日朝鮮人の研究。論文に「在日朝鮮人雑誌『季刊まだん』の作品分析—「アンニョンヒアボシ」と「無花果」を中心に—」(『跨境/日本語文学研究』Vol. 4, ソウル: 高麗大学校 GLOBAL日本研究院, 2017)、When a Personal Narration Represents the Zainichi Korean Narrative : Lee Hoesung's The Cloth-Fulling Woman(Forum for World Literature Studies Vol. 9, No. 2 : Knowledge Hu Publishing Company Limited Hong Kong WestLafayette)、『在日朝鮮人民族教育の変遷と定着』(『比較日本学』(49), ソウル: 日本学国際比較研究所, 2020)、共著に『在日ディアスポラ文学選集 : 5 研究』(ソウル: ソミョン出版, 2017) など。

The Ecology of the Cultural Topography and 'Glocality' of the Korean-Japanese Diaspora

The objective of this thesis is to introduce the Korean-Japanese diaspora research project currently being carried out in Korea, and also to collate research data that can help to promote exchanges and cooperative arrangements in East Asia. For this purpose, this thesis introduces the work of the Japanology Institute at Dongguk University, a priority research institute which is engaged in a support project of the National Research Foundation of Korea, on the issue of <The Ecology of the Cultural Topography and 'Glocality' of the Korean-Japanese Diaspora>. In September 2017, the Japanology Institute was selected to lead this six-year project, which will be completed in 2023.

The project is being carried out by experts in the various components of the Korean-Japanese diaspora. In Step1, several areas of interest were established, namely <politics・economy>, <society・education>, and <arts・physical education>, and a project reference library was also opened. Step 2 is currently being undertaken, entailing convergence/creativity interdisciplinary research. Through the process of carrying this research agenda forward, it will be possible to more comprehensively understand the overall ecology of the Korean-Japanese diaspora, and also to establish the cultural topography of this diaspora from the perspective of 'glocality'. In this way, the Japanology Institute at Dongguk University hopes to establish a general diaspora research platform, and then to grow into a world-class Korean-Japanese diaspora research institute.

Keywords Korean Residents in Japan(在日コリアン), Diaspora(ディアスポラ), Glocality(グローカリティ), Ecological Cultural Topography(生態学的文化地形), Priority Research Institute Support Project(重点研究所支援事業)

1 はじめに

本稿は、韓国研究財団の学術・人文社会事業である大学重点研究所支援事業を展開している東国大学日本学研究所を紹介し、東アジアの研究者と研究の成果を共有することにその目的がある。東国大学日本学研究所(所長：金煥基)は、日本の歴史・文化・社会研究を通じて日韓の相互理解を深め、文化交流を促すために1979年9月に発足した、韓国初の日本学に特化した研究所(日本学特性化研究所)である。これまで本研究は日韓関係における理解の幅を広める他、共生と協力の関係を築くことに努めてきた。2017年には韓国研究財団(NRF)の大学重点研究所支援事業に選定され、「在日ディアスポラの生態学的文化地形とグローカリティ」というアジェンダのもと、研究を行っている。「在日ディアスポラの生態学的文化地形とグローカリティ」は、在日ディアスポラ¹の生き方や総体的な社会基盤活動を「脱境界的でかつ多中心的な」グローカリティの観点から分析し、在日ディアスポラの生態学的文化地形を構築することに目的がある。研究期間は計6年で、第1段階が3年、第2段階が3年となっている。第1段階(2017~2020年、NRF-2017S1A5B8059712)では、「在日ディアスポラの生態学的基盤研究」をテーマに研究を行い、現在の第2段階(2020~2023年、NRF-2020S1A5B8104182)では「在日ディアスポラの融・複合創意研究」をテーマに研究している。

ディアスポラ(Diaspora)は、「撒き散らされたもの」という意味を持つギリシャ語だ。紀元前3世紀に翻訳された「七十人訳聖書(Septuaginta)」で初めて使われ、パレスチナを離れてアレクサンドリアなどの地域で亡命生活をしていたユダヤ人を指す用語である。以前はユダヤ人のディアスポラのみを意味していたが、最近は植民地支配で発生した多くの移住者、難民、亡命者をはじめ、自ら祖国を離れて他国に定着した移民者まで網羅する広い概念で使われている。中でも本研究チームは日本に定着した韓民族、在日ディアスポラを研究している。本研究プロジェクトの段階別の研究内容及び成果を紹介すると、以下の通りである。

2 第1段階「在日ディアスポラの生態学的基盤研究」と成果

本研究プロジェクトは、在日ディアスポラの生き方や総体的な社会基盤活動をグローカリティの観点から分析し、在日ディアスポラの生態学的文化地形を構築することを目的とする。第1段階では、在日ディアスポラ関連資料を総体的に調査・発掘・収集し、それらを生態学的観点から分析・体系化した。本プロジェクトの研究手法論は、以下の通りである。

¹ 植民地時代以降に日本に移住した朝鮮人とその子孫を指す用語は多数ある。在日韓人、在日朝鮮人、在日同胞、在日韓国人、在日朝鮮人・韓国人、在日コリアン、在日などの名称が、研究者の観点やスタンスによって多様な脈絡で使われている。本研究では朝鮮半島に民族的由来(ethnicity nationality)を持つ在日朝鮮人・韓国人の存在論的位置を網羅する概念として、「在日ディアスポラ」を使うことにする。国籍・地域の排他的なボーダーを超え実在する在日のグローカリティな立場を含めて表現するためである。

【図1】〈在日ディアスポラの生態学的文化地形とグローカリティー〉の研究方法

〈在日ディアスポラの生態学的文化地形とグローカリティー〉は、在日ディアスポラの生き方と総体的な社会基盤活動を研究し、在日ディアスポラの生態学的文化地形を構築することを目的とする。よって研究対象は在日ディアスポラの全般分野とし、特にこれまであまり注目されていなかった経済、民俗、スポーツ、音楽、演劇、芸能などの各分野をできるだけ可視化し、文化的実践行為の全体像をありのまま把握することに焦点を当てた。そのため、在日ディアスポラ関連の資料を「政治・経済」「社会・教育」「芸術・体育」の3つの領域に分類し、各領域を「人物+テキスト+コミュニティ」を介して総体的研究を行った。1段階の年次別研究テーマ及び領域別研究内容は、以下の通りである。

【表1】第1段階の研究テーマ及び内容

第1段階		研究内容		
		政治・経済	社会・教育	芸術・体育
生態学的 基盤 研究	1 年 目	形成と分化		
		帝国時代における朝鮮人の日本移住の様相と在日ディアスポラ共同体の形成 解放直後、在日ディアスポラ経済生態界の胎動	解放空間の在日朝鮮人社会と民族学校 在日ディアスポラメディア(新聞、雑誌)の出現と主体形成	在日ディアスポラ芸術家コミュニティの形成と展開 民族差別とスポーツナショナリズム
	2 年 目	定着と混淆		
		冷戦期における在日ディアスポラ社会の動揺と萎縮 在日ディアスポラ企業の成長と拡散	在日ディアスポラ知識人階層と日本社会 在日ディアスポラ文化の変容と民俗・風俗・宗教	在日ディアスポラの芸術活動と文化的位相 高度成長期における日本のヒーロー神話と在日ディアスポラ
	3 年 目	拮抗と共生		
		在日ディアスポラの政界進出と参政権問題 在日ディアスポラの経済活動スペクトルの多様化と社会還元の進展	在日ディアスポラ民族教育の社会文化的変動 共生社会への模索と帰属意識の二重化	日本大衆文化と在日ディアスポラ文化芸術の共存 スポーツと越境のアイデンティティ

第1段階の1年目には「形成と分化」、2年目には「定着と混淆」、3年目には「拮抗と共生」をメインテーマとし、各領域別にテーマの詳細を設定し研究を行って幅広い成果も達成できた。その成果に具体的に触れると、3年間計34本の学術論文が掲載された他、5回の国際学術大会、11回の招請講演会、12回のコロキウム、19回の定例研究会を開催し、国内外の研究者と学術交流を行った。特に初回の招請講演会では在日コリアンの作家金石範を招請し、「『火山島』の著者金石範と文学」をテーマに講演の幕を上げた。3年間の招請講演会やコロキウムで、俳優、舞踊家、経済専門家、企業家など多彩な分野の専門家を招き、在日ディアスポラに関する深みのある討論を行った。

東国大学日本学研究所は、第1段階で計5回の国際学術大会を開催した。1年目に「言語圏とディアスポラ文学」「近代化と民俗研究」をテーマに2回開催し、2年目に東京・在日本韓国YMCAにて「在日コリアン文学研究シンポジウム」を韓国文学翻訳院と共同開催した。2019年6月には東国大学文化学院日本学研究所開所40周年記念学術シンポジウム「世界平和と南北統一―在日コリアンの役割―」を開催し、国内外の研究者と在日ディアスポラと朝鮮半島、東アジアについて有意義な討論を行った。3年目には国際学術大会「三・一独立運動、五・四運動百年」を日本社会文学会と共同開催し、川村湊、小森陽一等海外の研究者を招請して学術交流を続けた。その他、第1段階の事業で計5本の在日ディアスポラの翻訳叢書を発行した。以下はそのリストである。

【表2】第1段階の翻訳叢書

連番	書名	著者	訳者
1	サッカーと愛国	清義明	辛承模
2	地平線	金時鐘	郭炯徳
3	在日朝鮮人に関する総合調査研究	朴在一	李芝英・朴羊信
4	「月はどっちに出ている」をめぐる2、3の話	李鳳宇	鄭秀婉・蔡炅勳
5	在日異人伝	高月靖	韓程善

翻訳叢書は、大学重点研究所支援事業の研究アジェンダと合致し、これまで韓国で紹介されていなかった在日ディアスポラ関連書籍を対象に選定した。他に韓国研究財団登載学術誌の『日本學』の6巻(第45輯~第50輯)を発行するなど、幅広い学術活動を通じて学際的な研究環境と土台を整えた。

東国大学日本学研究所は、自治体と協議し、市民と交流でき社会的にも貢献できるプログラム「市民人文講座」を実施した。特に2年目には研究責任者の金煥基が政府機関と協力し、オンラインにおける市民人文講座K-MOOC「コリアンディアスポラの生き方と文学」を行った。K-MOOCではハワイにおける移住民をはじめ、メキシコ、日本、中国、ロシア、北米、南米、ドイツのディアスポラを総体的に取り上げ、コリアンディアスポラに関する認識の拡大を図った。3年目に

は東国大学日本学研究所、中央図書館、ソウル市中区健康家庭多文化家族支援センターが「We Are Here：多文化共生社会と在日コリアンの声」をテーマに計6回にわたる市民人文講座を共同実施した。特に同講座は新型コロナウイルスの時代に合せてオンラインとオフライン両方で行われ、大学・自治体・市民社会を網羅する、第4次産業革命やポストコロナの時代に相応しい研究拡大のモデルを構築した。他にも学内に「在日コリアン資料室」を設け、計1,327件(図書1,268件、DVD59件)に及ぶ在日ディアスポラ関連資料を研究者や市民に公開し、在日ディアスポラに関する認識の裾野を広げた。上記の多角度のプログラムを通じて、在日ディアスポラを市民社会に発信し、一般の認識を深めている。

2年目には在日コリアンの文化全般に対する理解を深め、芸術・体育分野の研究を促すため、在日コリアン映画祭「日本映画の在日コリアンを顧みる」を開催した。同映画祭は大島渚の『帰って来たヨッパライ』『絞死刑』、井筒和幸の『パッチギ!』、崔洋一の『月はどっちに出ている』など韓国ではなかなか見られない在日コリアン映画を選定し、日本からフィルムを取り寄せ、韓国映像資料院の字幕提供を受けて行われた。小川翔太、趙慶喜、李鳳宇など日韓両国の映画研究者、制作者を招請し、在日ディアスポラ映画・芸術に関する理解を深める対談も行われた。在日コリアン映画祭という、これまでなかった形のイベントを通じて交流の分野を広めた他、在日コリアン映画に対する新しい研究方法論を提案して芸術・体育分野研究の進展を図った。

他にも東国大学日本学研究所は学問の次世代、在日コリアン研究専門家養成のための努力を多岐にわたって行っている。その一環として「日韓多文化共生社会の相互理解と実践」をテーマに、東国大学日本学科と横浜市立大学の学部生が参加する学生交流プログラムを行った。研究所と学科が連携したプログラムの実施で、日韓両国の大学生が多文化共生と共存の価値を共有し、実践できる機会を設けた。第1段階では次世代の研究専門家養成において目に見える成果もあった。第1段階の在職期間に専任研究員3名が他大学の学科や研究専任の教授となった。次世代の研究者養成に注力している本研究所と重点研究所支援事業の注目できる成果と言える。

東国大学日本学研究所は「在日ディアスポラの生態学的文化地形とグローカリティ」の第1段階である「在日ディアスポラの生態学的基盤研究」を通じて、植民地時代と独立、冷戦・脱冷戦時代の在日コリアン社会を「人物＋テキスト＋コミュニティ」を介して「政治・経済」「社会・教育」「芸術・体育」の分野に分け、「形成と分化」「定着と混淆」「拮抗と共生」を年次別テーマに設定して研究を行った。研究ではこれまで大きく注目されていなかった在日ディアスポラの経済、民俗、スポーツ、音楽、演劇、芸能など幅広い分野の議題を取り上げ、文化的実践行為の全体像の把握を積み重ね、第2段階研究の土台を作った。国内外の研究者

と交流し、その成果を市民社会に戻す過程を通じて、在日ディアスポラに関する認識を広めた。

3 第2段階「在日ディアスポラの融・複合創意研究」の推進及び目標

東国大学日本学研究所は、「在日ディアスポラの生態学的文化地形とグローカリティー」をアジェンダに、現在第2段階の「在日ディアスポラの融・複合創意研究」を行っている。第2段階の研究実施のため、第1段階では在日ディアスポラ関連の資料を総体的に調査・発掘・収集し、それらを生態学的観点から分析・体系化する作業を行った。今後の土台となる1段階の研究を踏まえ、第2段階では「融・複合創意研究」を行っている。在日ディアスポラの文化地形を「日本－朝鮮半島－グローバル」の空間のなかで俯瞰し、文化生産の動力を究明することで東アジアの平和と朝鮮半島の統一時代に向けた談論及び世界観の構築に貢献することが目標である。第2段階の研究方法及び目的は以下の通りである。

【図2】〈在日ディアスポラの融・複合創意研究とグローカリティー〉の研究方法

第2段階では「空間＋テーマ」を媒介に、「日本－朝鮮半島－グローバル」という空間における在日ディアスポラの融・複合的交差に注目する。在日ディアスポラは急変する国際情勢の中で境界を行き来し、脱領土化・再領土化の過程を繰り返して重層的・多層的文化地形を構築した。本研究では在日ディアスポラの文化地形の構築過程を動的現象として捉え、発話のスタンスも流動的な在日ディアスポラの存在、グローカリティーについて追究していく。その過程で、日本－朝鮮半島－グローバルという空間における在日ディアスポラの多層的・重層的文化地形を構築し、脱領土化・再領土化の繰り返しによる在日ディアスポラの文化動力を究明

する。さらにグローカリティーとダイナミズムの観点から在日ディアスポラ文化を研究し、未来志向の価値を構築する。そのための年次別研究テーマ及び内容の詳細は以下の通りである。

【表3】年次別研究テーマ及び内容

第2段階		研究内容
融・複合・創意研究	1 年 目	日本ナショナリズムの再登場と在日ディアスポラの共存模索 【日本・在日・ナショナリズム】
		日本の文化ナショナリズムと在日ディアスポラの文化芸術
		「嫌韓」言説の胎動と文化ナショナリズムの登場
		日本社会の右傾化と在日ディアスポラ民族教育の進路
		スポーツナショナリズムの克服とダブルアイデンティティの肯定
	2 年 目	統一時代における朝鮮半島と在日ディアスポラの役割 【朝鮮半島・在日・統一】
		棄民の歴史としての在日ディアスポラと朝鮮半島
		在日ディアスポラ資本の朝鮮半島進出と文化学界への寄与 韓国・北朝鮮を横断する在日ディアスポラのナショナル・スポーツリズム
	3 年 目	グローカル時代、多文化共生のための在日ディアスポラの複合的価値 【グローカル・在日・平和】
		在日ディアスポラのグローバルネットワーク 在日ディアスポラの共生経験と世界中在外コリアンとの疎通インフラの構築および模索 グローカル時代における在日ディアスポラ文化の価値と展望

第2段階の1年目では「日本ナショナリズムの再登場と在日ディアスポラの共存模索」をテーマに日本におけるナショナリズムの再登場、その中で現れた在日ディアスポラの活動や文化地形を研究する。2年目には「統一時代における朝鮮半島と在日ディアスポラの役割」をテーマに、視線を朝鮮半島に移して朝鮮半島の統一と南北問題における在日ディアスポラの役割と価値を幅広く取り上げる。3年目の「グローカル時代、多文化共生のための在日ディアスポラの複合的価値」では、研究の範囲をグローバルに拡大し、多中心的なグローカリティーの観点から研究を進めていく。その過程で融・複合的交差・統合の研究方式を用い、在日ディアスポラに関する談論を通じてグローカリティーに対する理論的な議論を展開し、朝鮮半島と東アジアの同時代的価値の創出を模索する。

上記第2段階の目標を達成するために、在日ディアスポラ・コリアンディアスポラ関連の国際学術大会、コロキウム、招請講演会などを開催し、在日ディアスポラの専門家を分野にこだわることなく招請する。多彩な学術の行事やプログラムを通じて、次世代の研究者を育成し、世界的な研究者と交流していく。他にも翻訳叢書や学術誌を発行し、さらに6年間の重点研究所支援事業の研究結果を集

大成した研究叢書、翻訳叢書、学術誌を発行して幅広い形で在日・コリアンディアスポラ研究に貢献していく。

学術的な貢献の他、2段階でもオンライン・オフラインの「市民人文講座」を開催し、市民社会の在日ディアスポラに対する理解を深めるプログラムを実施していく。在日コリアン資料室の運用も続け、研究の成果を社会に還元する。特に第2段階では作家金石範、梁石日の生原稿のような歴史的価値ある在日ディアスポラの史料を資料室や博物館に展示・公開することを企画している。音楽会、写真展、図書展などこれまでなかった形の在日ディアスポラ関連行事を企画し、新しい研究方法論を提案する他、社会に貢献していく。

総合すると、本研究のプロジェクトの第2段階では第1段階の生態学的基盤研究を踏まえて在日ディアスポラの政治・経済、社会・教育、芸術・体育分野の統合的な融・複合創意研究を予定している。その過程で在日ディアスポラの文化生産の動力を究明し、在日ディアスポラの生態学的文化地形を構築することが本研究プロジェクトの目的である。

4 最後に

東国大学日本学研究所は、2017年から2020年までの3年間、大学重点研究所支援事業「在日ディアスポラの生態学的文化地形とグローカリティー」の研究1段階を終え、現在2段階の研究を行っている。重点研究所支援事業による研究成果の活用案及び期待される効果は以下の通りである。

学問的には、融・複合創意研究を通じて新しい文化研究方法論を提案し、学術論文、研究叢書、翻訳叢書、学術誌の発行を通じて幅広い研究資料を学界に提供する。さらに韓国初の在日ディアスポラ研究専門資料室とアーカイブを構築し、学際的研究の拠点を確保する他、ネットワークのインフラを整えて専門センターとしての役割を果たす。

社会的には、学問の次世代を育て、多彩な教育プログラムを開発して在日・コリアンディアスポラ研究者の専門養成機関を目指す。在日コリアン資料室を公開し、その資料・史料を閲覧できるようにする。さらに大学－自治体－市民社会が連携したオンライン・オフラインの「市民人文講座」を開催し、在日ディアスポラに関する社会の認識を広める。また、音楽会、写真展、図書展などこれまでなかった形の行事を企画し、市民社会と交流する他、在日・コリアンディアスポラ研究の新しい研究方法論を提案する。

上記にとどまらず、文化的少数者と共生できる在日ディアスポラの実践的モデル及び多民族・多文化社会に向けた世界観を提案する。その過程で文化の効用

性に触れ、多文化共生社会の手本を提案して朝鮮半島の平和統一及び東アジアの平和に資する世界観を提示していく。同時に総合的なディアスポラ研究のプラットフォームを構築し、世界のコリアンディアスポラとの交流・連帯の拠点としての役割を果たす。東国大学日本学研究所は、研究のアジェンダを究明し、在日ディアスポラの生態学的文化地形を構築する他、世界的な在日・コリアンディアスポラ専門研究機関を目指す。